

平城京の発掘調査

本年度の発掘調査は25件に上る。内訳は宮城内10件、京城内14件である。このうち、学術研究および史跡整備に関わる発掘調査は9件4,918㎡、住宅建設等による緊急調査は15件3,068㎡である。本年度は庭園遺構の発掘が多かったことが特徴である。

平城宮内の調査については、東院の南の二条条間路北側溝の調査(第301次)では、堀地部分で庇のつく大型の掘立柱建物、東院南門の前面では敷石を施し石で護岸した側溝と大型の橋をそれぞれ検出した。これらは東院あるいは楊梅宮の造営に伴い南門周辺の整備が進んだものと解される。また、東院庭園内の北西部(第302次)では、曲水宴に用いたと考えられる蛇行溝を27m程検出し、玉石敷きの小池が流れの一部にあることがわかった。これは流れの途中で水を貯める施設であり、流杯渠の意匠や構造を考える上で重要な発見である。

第一次大極殿院地区では、塼積擁壁西端から西面築地回廊部分の調査(第305次)を行い、この部分の地盤は2mを越える盛土造成をしていることがわかった。また、塼積みが5段階残存しており、塼の積み方の実態が明らかになった。さらに西宮の時期の暗渠からは「近衛府一」と墨書された須恵器が見つかり、禁中の警備に関する資料となった。大極殿院内では復原整備での正確を期すために、大極殿(第311次)や北面回廊(次数なし)の一部の再発掘を行い、位置や規模を確定した。

次に平城京城については、興福寺で中金堂と中門を結ぶ回廊の北西部で境内整備事業に伴う調査(第308次)を実施し、東面および北面回廊や中金堂前面の石敷き等に加え、春日曼荼羅などで回廊に接して描かれる儀式用仮設建物を実際に検出した。出土遺物では、奈良時代の緑釉水波文塼、桃山時代の金箔瓦などが注目される。

都市計画道路建設に伴う西隆寺の調査(第306・309次)では、金堂前で灯籠の根石、寺造営前の西二坊坊間西小路両側溝等を検出した。

庭園整備事業に伴う旧大乘院庭園の調査(第310次)では、『大乘院四季真景図』等に描かれた西小池の東岸を検出し、西小池がJR西日本の保養施設の下まで広がっていることを確認した。

東院庭園のすぐ東に位置する法華寺阿弥陀浄土院は、水田の中に大きな立石があることから、庭園があることは推測されていたが、トレンチ調査(第312次)により複雑な汀線をもち底に石を敷く池、景石を伴う岬や中島、池の中に建つ建物遺構を検出した。この様相は浄土変相図を想起させ、現存する浄土庭園の遺構で最も古い平等院庭園の造営から三百年遡る、浄土庭園の嚆矢と位置付けることができよう。出土遺物には、宝相華文を透かし彫りにした垂木先金物などがある。

左京三条二坊二坪では、長屋王邸の南西隅にあたる場所で洲浜の園池を検出し(第303-8次)、邸宅内に複数の園池があったことが明らかになった。

左京三条一坊十坪の西半部で行った調査(第304次)では、坪の東西心と東一坊坊間路東側溝心の中軸線上に規模の大きい建物2棟が並ぶことがわかり、坪を東西に二等分する敷地割であったことが想定された。

なお、現地説明会を下記の通り実施した。

(内田和伸/平城宮跡発掘調査部)

5月29日	第301次(二条条間路北側溝)	石橋茂登
9月26日	第305次(第一次大極殿院)	高橋克壽
12月4日	第308次(興福寺中金堂院回廊)	箱崎和久
3月4日	第310次(旧大乘院庭園)	金田明大
4月15日	第312次(法華寺阿弥陀浄土院)	清野孝之